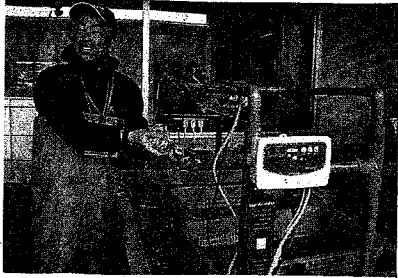


広島の名産であるカキを新鮮なまま輸出する 取り組みが始まった。カキ生産者ら4社による 「HIROSHIMA Oysters」(ヒロシマオイスターズ) (広島県三原市) は13日、 広島空港(同)に生きたカキの出荷施設を設置。 空輸ギリギリまで水につけることで新鮮な状態で輸出できる体制を整えた。県も協力し、世界中に広島カキのファンをつくる。

4社連合、空港に出荷施設

「海外は生ガキへの需要が強い。究極の新鮮さで世界に届ける」。ヒロシマオイスターズの佐々木猛社長は同日、広島空港の貨物ターミナルで開かれた出荷施設の開所式でこう述べた。

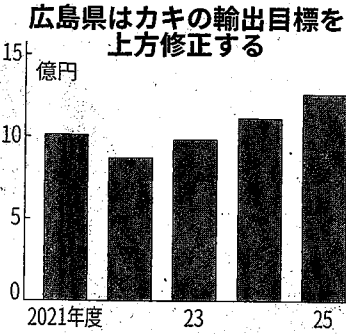
同社は2月の設立で、広島魚市場(広島市)、大崎上島町、音戸海産(広島県呉市)、倉橋島海産(呉市)の共同出資会社だ。出資比率は公表していない。



ヒロシマオイスターズの出荷施設には紫外線を使った滅菌設備がある(13日、広島県三原市)

水槽や滅菌設備導入

水につけ鮮度維持



(注)21年度は実績、22年度からは目標

施設には広島県が開発した紫外線を利用したカキの滅菌設備を導入した。県のルールでは生食用のカキは3月末までしか出荷できないが、この設備を使って滅菌したカキは4月以降も生食用に出荷できる。出荷目標額は設けていない。

既に受注が入っており、3月中には施設を通じたカキを輸出できる見込みだ。広島のカキの輸出は、羽田空港など県外の空港を経由するほか、広島空港には台湾便があるため台湾経由でシンガポールなどアジアに輸出することも可能。冷蔵設備もあるため、切り身の生魚の輸出にも使えた県産カキの輸出促進を

目指す協議会に入れば施設を利用できる。ヒロシマオイスターズは生産者からカキを購入し、輸出して売り上げる。

同社によると、「生ガキは新鮮であることに越したことはない。航空便の出発時間ギリギリまで水につけることでおいしさを最大限に保てる」という。施設を経由せずに広島から空輸する場合に比べて、2〜3日ほど長く水につけておけるため鮮度を保てる。

広島県もカキの輸出に力を入れている。23年度中に東南アジアや中国で商談会を開くほか、5月に広島市で開かれる主要7カ国首脳会議(G7サミット)を機に、海外のメディアなどに魅力を伝える機会を設ける考えだ。

県は25年度に県産カキの輸出額を、21年度推計

兵庫・小野市に工場完成

エフピコ、物流拠点も併設

食品トレー最大手のエフピコは13日、建設を進めていたプラスチック製容器の生産を手掛ける関西工場(兵庫県小野市)を報道陣に公開した。単独の工場としては最大の生産能力で、原料の受け入れから成型、製品の入

比で6割増となる12億6000万円とする目標を掲げている。しかし想定以上に需要があり、為替

の円安の効果もあって21年度の輸出額は10億1000万円となり当初推計の7億8000万円を大

幅に上回った。そのため県は25年度の目標を修正する方針だ。(阿部晃太郎)

式典で、エフピコの佐藤守正会長は「新拠点はドライバリーの確保や長時間労働などの問題にとって大きな意味がある」と強調した。これまで近畿圏への出荷は本社が立地する広島県福山市から運搬

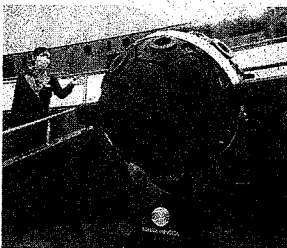
り、3月中には施設を通じたカキを輸出できる見込みだ。広島のカキの輸出は、羽田空港など県外の空港を経由するほか、広島空港には台湾便があるため台湾経由でシンガポールなどアジアに輸出することも可能。冷蔵設備もあるため、切り身の生魚の輸出にも使えた県産カキの輸出促進を

島根の施設 プラネタリウム更新
島根県の県立三瓶自然館サヒメル(大田市)が老朽化したプラネタリウムの放映機を更新した。新鋭機種を導入し、星空をより美しく放映できる。国立公園である三瓶

設置した放映機はコンパクトなプラネタリウム最上位機種「インフイニウム」シリーズ。写真同機の導入は中四国地域で初めてという。これまでの放映機の光源はハロゲンランプだったが、同機は発光ダイオード(LED)を使用。星の明るさは2倍以上になり、色合いも含めて本物に近い

星空を再現できる。最新のレーザー光源プロジェクターも導入し、高繊細の4K映像を使って上映する三瓶山の美しい風景や惑星、銀河など宇宙の映像も魅力だ。音響・演出照明も更新した。同館は2022年春にプラネタリウムがある大型ドームのスクリーンや座席を改装している。11日に開催された式典で、島根県の松尾伸次副知事は「今回の放映機の更新もたちに素晴らしい贈り物ができると期待している」と期待した。

し、新たな設備も導入。まだ空きスペースがあるため、生産ラインの増設もできるといふ。関西ハブセンターには出荷品の仕分けを自動化する設備を整備した。佐藤会長は「全国の拠点から半径100キロで全人口の85%をカバーできる物流網になった」と話す。



島根県の県立三瓶自然館サヒメル(大田市)が老朽化したプラネタリウムの放映機を更新した。新鋭機種を導入し、星空をより美しく放映できる。国立公園である三瓶

設置した放映機はコンパクトなプラネタリウム最上位機種「インフイニウム」シリーズ。写真同機の導入は中四国地域で初めてという。これまでの放映機の光源はハロゲンランプだったが、同機は発光ダイオード(LED)を使用。星の明るさは2倍以上になり、色合いも含めて本物に近い

星空を再現できる。最新のレーザー光源プロジェクターも導入し、高繊細の4K映像を使って上映する三瓶山の美しい風景や惑星、銀河など宇宙の映像も魅力だ。音響・演出照明も更新した。同館は2022年春にプラネタリウムがある大型ドームのスクリーンや座席を改装している。11日に開催された式典で、島根県の松尾伸次副知事は「今回の放映機の更新もたちに素晴らしい贈り物ができると期待している」と期待した。